



凡夫の自覚から.....

心、枝を伝わる猿の如く.....

めでたき本願.....

凡夫、自力か他力か選ぶ.....

阿弥陀さまの願いに沿う.....

凡夫が救われる——平等の大慈悲.....

第三章 み教えから探る人間観

問答や手紙、御法語から見る

お念仏の価値.....

悪いことをしてもいいの？.....

いと尊かりけり.....

女性もその身のままで.....

「尼入道」は女性.....

おわりに.....

# 第一章 法然上人の文献

法然上人の教えを知るには

はじめに

今回のテーマは「宗祖のみ教えと人権」ということでございますが、法然上人が生きられた平安時代末期から鎌倉時代、この日本に今日で言うような「人権」という意識があったか、と考えたら、「なかった」と答えるしかありません。いや、「人権」という言葉そのものも、明治時代になって外国から「権利」という意識が入ってきてから出来た言葉、だったと思います。

そこで、ここでは、「法然上人の人権観」というより、法然上人が人間をどう見ていたか、ということをお話ししながら、「法然上人の人間観」を探ってみたいと思います。

本日のお話も、一人の研究者というか、浄土宗の教師として私は法然上人の書物、あるいは、法然上人がいろいろお残しになった文章を読んで、このように考えますということしか言えません。しかし、当然といえば当然なのですが、法然上人は平等思想の持ち主で

あるというのが結論でございます。

やはり、歴史の中ではつきりと男性も女性も同じように往生出来るというような言い方をなさっているのは、法然上人がトップバッターだと思います。

女性については、大本山清浄華院しやうじやうけいんのご法主・伊藤唯眞台いとういしん下が著した『浄土宗人権教育シリーズ3 仏教における女性観』を読んでいただければおわかりになると思います。

そういうようなことで、私の調べた範囲の法然上人ということでお話しさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

### 法然上人のみ教えは？

さて、本日の題は「宗祖のみ教えと人権」、そして、はじめに「教義から差別を考える」、それから次に「宗祖のみ教えと人権について考える」となっています。

同じようなことだな、と思っていたのですが、一番目が「教義から」という固く絞った感じで、二番目は「み教え」。総タイトルも「み教え」ですから、み教えというのは多分、もう少し幅広く法然上人がおっしゃったことすべてを含む、御法語類とか手紙類とか、あるいは、質問に答えたちよつとした短いお言葉、そういう一切を含むものから、法然上



法然上人画像（総本山知恩院蔵）

人の思想をくみ取ることがみ教えだと私は思いました。

ですから、はじめのほうは教義から平等とか差別を考える。二番目は、教義より幅を広げて、み教えから考えるということだと思えます。

そう思つて考えてみると、ここで大切なことは「法然上人のみ教えとは何だ」ということです。そうすると、結局、触れられるのは文献でございます。幸いに、法然上人の文献はいっぱい残っているわけです。

ただ、真筆というのは極端に少ない。およそ高僧と言われる方の中で一番少ない。いろいろな理由が挙げられておりますが、まだわからないような状態です。ひとつは、迫害があつて無くなつたのだと。焼けたり、焼かれたり、そういうようなことで散逸した。そういうこともある

でしょう。日蓮聖人は真筆が多い。『日蓮聖人真蹟集成』という分厚いものが出ています。親鸞聖人もいっぱいあります。『親鸞聖人真蹟集成』、例のキツとした字で特色があります。『法然上人真蹟集成』というのは法蔵館から出ていますが、そんなに数はありません。この中には『選択本願念仏集』の原本といいますが、草稿本と言われているものが入っています。これは草稿本ですから、書き直しなどをした推敲の跡が見られる本です。京都の廬山寺にあるので、「廬山寺本」と言われています。

しかし、この本の一章から一六章まで全部が法然上人の真筆かというところではないです。この本の『選択本願念仏集』というタイトルと、その後の「往生之業念仏為先」のところまでで、その後が続く「安楽集の上に云く、一切衆生……」というところからは、法然上人が述べるのをお弟子さんが交代で筆記したと言われています。ですから、わずか一行ぐらいのもので、その他には京都嵯峨の清凉寺にある熊谷直実宛の文書とか、いくつがあるぐらい、少ないです。

では、どういうふうにしたらいいのか。法然上人のみ教えを知るには、法然上人の残された文章、文献による。その実態はどうか、それから、それをどういうふうに取り取ったらしいかということを上申し上げさせていただきます。

代表的なものは、『黒谷上人語燈録』、『西方指南抄』、それから、『醍醐本法然上人伝記』、『法然上人行状絵図』、これが主なものです。

●『黒谷上人語燈録』

『黒谷上人語燈録』というのは、浄土宗第三祖良忠上人のお弟子の望西楼了慧道光が著したものです。この方は非常に筆が立つ方で、三祖の伝記も書いていますし、宗学的な「浄土三部経」の研究もなされています。

この方が法然上人の文献類を集められてまとめたものが、『黒谷上人語燈録』です。法然上人のみ教えの燈火がスーッと伝わってくるようなタイトルです。これが法然語録の中の最大部でございませう。

漢文体一七編、これは「漢語燈録」と言われています。そして和文体二四編、「和語燈録」と言われています。また、それに漏れたものをさらに集めたのが『拾遺語燈録』。これは上巻に漢文体が三編、中、下巻合わせて和文体八編。ですから、法然上人のものと思われるものを大量に集めてあるわけです。文永一一（一二七四）年、法然上人が亡くなったから六三年後に著されています。

この中に、「門徒の中に異説紛々」と書いてあります。法然上人の弟子筋だけでも、